

江戸蕎麦ものがたり

石臼の音

江戸ソバリエ協会 理事長
ほしひかる

江戸ソバリエ知人塾の仲間たちと佐久市の大西酒造会社を訪れたことがあります。その会社は小さな歴史資料館を併設しておりました。展示物はそう多くはありませんが、そのなかに縄文中期の石皿がありました。たかが石ですが、いえばこれは臼の祖ですから、私たちソバリエにとっては関心のある考古物です。伺ったところによりますと、辺りの浅間山麓の縄文遺跡からは石皿が多く出土していて、近隣の軽井沢町歴史民俗資料館や御代田町浅間縄文ミュージアムなどでも観られるそうです。

だいたい、信州という所は縄文時代の遺跡が多いことで知られています。一帯は水や動植物が豊富だったそうですから、住みやすかったのでしょう。

とくに当地の縄文人は、動物は鹿など、魚類は鮭など、そして山の^{どんぐり}団栗、栗、^{くるみ}胡桃などを狩猟採集して食べていたようです。なかでも団栗、栗、胡桃など木の実類には硬い殻に守られていますから、石で殻を砕いて実を取り出す必要があります。

この作業では殻を割ると中の実まで潰してしまうこともありました。そこで彼らは石皿と石棒を工夫し、殻を丁寧に割った後、中の実を石皿に置いて、**a)**石棒で叩いて潰すか、**b)**石棒を転がして磨り潰すかして粉状にすることを覚えました。いわば食糧の加工(製粉)の始まりです。

なかには石皿が平でなく、凹型の石皿もあります。凹型だと実が外に零れません。石棒も凹に合う物になりました。これが**a)**^{つきうす}搗臼と杵の祖といえます。そ

うして先の**b)**が^{ひきうす}碾臼の祖だといえます。こうした動きは日本列島に限ったことではありません。中国の新石器時代中期・後期の黄河中流・下流域でも早くから出土しています。

日本列島では、縄文後期・晩期になりますと人口が増えてきて、狩猟採集の食糧では賄えなくなり、生活は植物の“栽培”へと変わっていきます。

人類は【野生植物・動物の採集・狩猟 → 植物栽培・動物飼育】の大変革を果たすのです。

こうして日本は、稲栽培の弥生時代へと移っていったのです。そうなりますと、食糧加工道具として最も必要だったのは、**b)**碾臼型より、**a)**米を精米する搗臼と杵でした。香川県出土の銅鐸「袈裟襷文銅鐸」(前2世紀～前1世紀)には杵を

搗いている人間が描かれていますから、弥生時代の日本列島に銅鐸とともに搗臼と杵が伝わっていた証です。



[石 皿]

そうして次の古墳時代になりますと、大足彦忍代別大王(景行天皇)には大碓と小碓の双子の王子がいたと伝えられています。このように大王家に「碓」とよばれる人物がいたということから、古代人にとって碓が先進的で大事であることを認識していたことが分かります。

ちなみに、稲の方を見てみますと、同じ稲でも弥生時代は《熱帯ジャポニカ》(焼畑)、古墳時代以降からは《温帯ジャポニカ》(水田)へと粘り気のある品種へ変わり、それに伴って「米の調理法」も変化してきたといわれています。

このような稲(米)の「変化」の意味するところは日本人の米への集中化、つまり食生活的には「米＝主食」となり、政治的には「米＝国家」となっていたのです。こうした状況を道具の面から支えたのが精米用搗臼だったといえます。

話は飛びますが、井伏鱒二に「石臼の話」というたった4頁の掌編小説があります。ここで申上げておきますが、搗臼には石製や木製がありますが、碾臼は石製しかないので、「石臼」というときは碾臼を指します。

それからもうひとつ、石臼には「溝」があります。一般的には六分画、八分画といわれるものです。他に異形のものもありますが[注1]、こうした溝は食物史からも見て石臼の大変革といわれています。工夫された時代は明確ではありませんが、おそらくギリシャ時代ではないでしょうか。紀元前から現代まであの溝は変わっていないところがすごい話だと思います。

ところで、井伏鱒二の石臼(つまり碾臼)の話はこうです。

毛筆で梵語が20行ぐらいい書いてある石臼(砂岩)を秩父の和尚さんが持って来たというのです。しかもその字が縦書きだから中国経由の石臼だろうとか、留守中に別の寺の和尚さんが来て「昔の良い梵字を読ませて頂きましてありがとうございました」と丁寧に挨拶して帰ったなどとかを述べているだけの小説です。

ですが、掌編小説というのは短いだけにたまたま印象に残るものがあります。

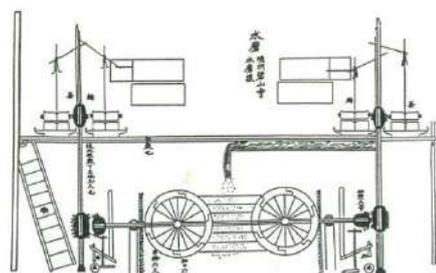
この「石臼の話」の場合もそうでした。梵字が縦書きだから中国経由の石臼だ

ろうとあるだけで、まるで石臼の伝来ルートを暗示させてくれたような井伏の文学手法に感心したのです。

さて、この話を予告として、鎌倉時代になりますと、食べ物の世界に大変革の兆が見えました。それは留学僧の活躍が寄与しているのですが、そのうちの一人が円爾です。彼が、1241年に南宋から帰国する際に持ち帰った「水磨の図」が日本人の食生活を大きな影響を与えたのでした。図は『大宋諸山図』の最後の部分に描かれていた明州の碧山寺の「水磨様」という水車の図でした。それを現代になって円爾の故郷(駿河国安倍郡藁科)である静岡市が復元しましたところ、2階建ての水車小屋が完成しました。臼は、1階に搗臼2個、2階に碾臼2個が水車によって回転するようになっていました。復元に携わった担当者の方に話をうかがうと、「水磨の図」の通りに造ったら、このようになった。「水磨の図」は絵ではなく、数台の臼を動かす製粉装置(水車場)の設計図だったとおっしゃいます。

この「設計図だった」という言葉の意味は大きく、おかげでいろいろと謎が解けてきました。

第一に設計図は製作のための図面ですから、円爾は製作するために中国から持ち帰ったものと判断できます。



茶、小麦の製粉と米搗 無著道忠撰『大宋諸山図』に取められた明州碧山寺の水磨。円爾并円(聖一国師)が仁治2年(1241)に中国から持ち帰ったといわれるもので、精米、製粉機の図ではわが国最古、京都、東照寺。



【水磨様 設計図・復元水車・ほし復元絵】

現に、鎌倉中期(1222～87年)の碾臼が大江御厨(東大阪市・大東市・門真市)の

うちの西の辻遺跡(東大阪市石切町)から出土しました。それは国産の最古の碾臼と判断されていますが、直径 27.5~28.0cm、厚さ 9.3cm、重さ 12.5 kg、岡山県万成石と思われる薄桃色の花崗岩でした。ちなみに、同遺跡からは、鎌倉後期の碾臼や、最古の茶臼も出土しています。また大江御厨は鎌倉時代には水走氏の領地であり、室町時代の重臣山科家の支配下にありましたから、大江御厨は足利幕府の石臼の製作拠点の一つであったことがうかがえます。

それから、1323年に元国の慶元路から博多へ向かう貿易船が、韓国新安郡道徳島 20 kmで嵐に遭遇して沈没したことがありました。韓国がその沈没船を調査したところ、夥しい数の陶磁器や銅銭とともに2個の碾臼が確認されました。日本は碾臼の国産化に着手しながらも、さらに輸入にも努めていたわけです。井伏氏の小説通りのことがあったのです。

謎解きの第二点は何のために円爾は水磨の図を持ち帰ったかということです。

円爾の師は栄朝(上野国長楽寺)、その師はあの『喫茶養生記』の栄西です。栄西の革新魂は栄朝を通して円爾に伝わったと思われます。そういう円爾は日本の寺社に点心料理を伝えるために製粉(「水磨の図」)、製麺道具、製麺の法を持ち込んだのでしょ

うです。ですから聖一国師円爾を開山とする東福寺(京都)の案内書には「円爾が製麺を興した」と記してあるのです。円爾のこうした業績は松尾芭蕉も知っていたらしく、「石臼ノ頌」で、聖一国師(円爾)は中国から石臼の技術を持ち帰り、それで自分の肉体を養い、また仏の真理である法身を知った。…石臼の音は単純でうるさいが、聞いているとどこか趣がある」と、それこそ趣のあることを述べています。

そうした円爾の思いが具体的に見えるのが14世紀です。

麦麵(索麵)が醍醐寺で振舞われていたことが史料(中原師守文書)に登場します。また1351年制作の『慕^ぼ帰^き絵^え詞^{ことば}』には、京・本願寺三世覚如(1270~1351: 親鸞の曾孫)邸でのご接待で麵が描かれています。



〔京 覚如邸〕

蕎麦関係では、京・相國寺で蕎麦(1438年)、蕎餅(1489年)、雑麵(1490年)が振る舞われていたことが、相國寺の『蔭涼軒日録』に記録されています。また

ソハカユモチイ(蕎麦搗)も『山科家礼記』(1468年)に記されています。

これらは、『蔭涼軒日録』の1459年の水車再建の記事からしますと相國寺内には水車が設置され、動力による製粉が行われていたことによるのです。

また、こうしたことは1489年ごろに多治見備後守貞賢が『四條流庖丁書』をまとめ上げたことと無縁ではありません。室町時代は今でいう「和食」が京で誕生した時期でもあるのです。

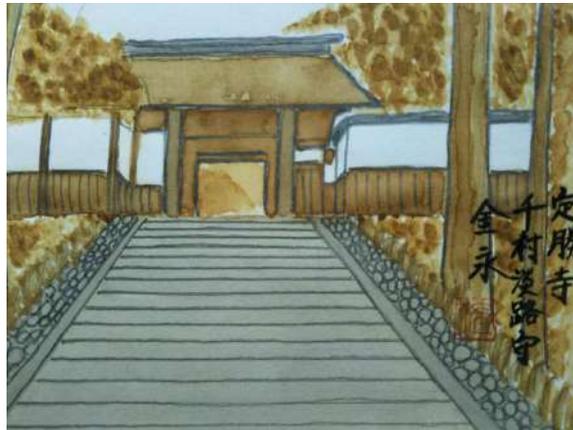
しかしながら、麵文化が花開いた室町時代も終焉の時がきました。

戦国の雄・武田信玄が死去し、足利15代将軍義昭が織田信長によって京を追われたころ、信濃の木曾氏の菩提寺定勝寺(中山道須原宿)の仏殿の唐戸修理の祝いに金永なる人物が蕎麦切を振舞ったことが、「信濃史料 - 番匠作事日記」(1574年)に記録されていました。

史料を発見した長野の郷土史研究家の関保男や小林計一郎によれば、京の麵文化は室町中期ごろに信濃へ伝わり、寺院における齋や点心用として素麵などの麵類が作られていたといえます。つまりは先述の東福寺や相國寺などの麵文化が地方へ流出していたのです。

このことは、定勝寺境内に「民謡 須原ばねその里」の碑が建っていることにも表われています。なぜかといいますと「ばねそ」踊りの源流は、民謡研究家によれば京・賀茂の「はねす節」といいますから、京と木曾を行き来していた番匠(寺大工)が嘉慶年間(1387~89)に須原へもちこんだものでしょう。

いえば、京と東国を結ぶ中山道は、京の麵文化も踊り文化も通る街道でもあったのです。



【定勝寺:ほし絵】

さて、いよいよ蕎麦切の江戸入りです。京の蕎麦文化が中山道を通って江戸へやって来ました。有名な史料があります。『慈性日記』の慶長十九年(1615年)二月三日の条件に、尊勝院(京)慈性と薬樹院(近江)久運と東光院(江戸)詮長が、町の風呂へ行ったが、人多くて戻り、常明寺で蕎麦切を振舞ってもらったという記録されています。[注2]

蕎麦切があるのでしたら、当然、蕎麦切を作るための碾臼、製麵道具、製麵の法も常明寺に伝わっていたと考えるのが一般的です。そしてそれらが伝わっていたのは常明寺だけとはかぎらないでしょう。そうしますと、それ相応の蕎

麦粉の需要、ひいては製粉水車の存在が想定されます。

そこで江戸の水車の話になります。なぜかといいますと、水車は複数の石臼を稼働させる製粉工場です。大都市の江戸には必要でした。それから武蔵の石臼といえば、奥多摩連山の入口にある伊奈村(あきるの市)の石臼が知られていました。その石工は1603年ごろ、江戸築城のために信州伊奈から武州に移り住みました。その後の元禄十年(1697年)に多摩川仙川村に設置された水車が江戸近郊で最初の水車とされています。それが1791年には水車は33台までになり、そして天明年間(1781~89)に急増しました。このころは、筆者が江戸蕎麦の代表としている《ざる蕎麦》が登場したところです。



[伊奈の石臼：土屋富孝氏写真]

後に、「水車王国」と称されるようになった日本全土には約62,000箇所の水車場がありましたが、そのうち明治(1883年)の東京でいいますと、776台(都内161台+三多摩615台)が動いていました。しかも前田清志(産業考古学会、玉川大学)の指摘では、1)武蔵野の水車の規模は全国的に見ると大型であり、2)武蔵は製粉用水車が存在していたことが特徴的だと述べています。つまり、地方の水車は精米用の搗臼でしたが、武蔵の水車は製粉用碾臼を回していたということです。

こういうことから、770台の水車が江戸後期の江戸に3000軒以上在ったという蕎麦屋を支えていたことができるでしょう。そうしますと、武蔵野国には、次のような流通体系が成立し、稼働していたというのがこの話の結論です。

蕎麦の生産者→製粉業者→粉屋→蕎麦屋→客

最後に、ある石臼のエピソードをご紹介します。

江戸ソバリエ認定事業を立ち上げた仲間のお一人に笠川さんという方がいらっしゃいます。ある日のこと、一茶庵を創立し、「蕎聖」といわれた片倉康雄自らが字を彫った石臼を引き取ってくれる人はいないかとのご相談をいただきました。うかがいますと、笠原さんは蕎麦に大変詳しく高瀬礼文先生と親しくされていて、高瀬先生から頂いたとのことでした。私もあちこち話を持ちかけましたが、たいていの方は、「高瀬礼文」「片倉康雄」と聞いて、恐れ多いと尻込みされました。そうしているうちに、ある蕎麦屋さんに引き受けてもらいました。その蕎麦屋さんに行きますと、石臼は今も時々、グルグルと音を立

てて回っています。石臼の、この趣のある音も蕎麦切の美味しさのひとつのように思えます。



[片倉康雄刻字入り石臼]



[注1] [異形の溝の石臼 秦野市「くりはら」]

[注2]：常明寺は現在、存在していません。そのために「常明寺は何処に在ったのか？」という謎解きが話題になっていますが、筆者は**神田説**を唱えています。

なぜかといいますと、慈性や彼の父は、度々神田の**法性寺**(上図の「神田上水」の下左)を宿にしていますし、また慈性ら3名が行った「**町の風呂**」は風呂事業の歴史から見て、有名な神田の丹前風呂の確率が高いとみているからです。そうしますと、丹前風呂からそう遠くない所に常明寺が在ったことが考えられます。

丹前風呂というのは現在の神田小川町・神田淡路町・神田司町界隈にありましたから、常明寺の所在は現在の「**神田藪蕎麦**」(下図の**誓願寺**)辺りに在ったのではないのでしょうか。



【寺と書かれたうちのいずれかが常明寺！】

参考：松尾芭蕉「石臼ノ頌」(訳：江戸ソバリエ高橋孝夫)、伊藤汎『つるつる物語』、林観照校訂『慈性日記』、『藪蕎麦と藪睦会』、大西酒造会社・歴史資料館、「神並・西の辻・鬼虎遺跡発掘調査整理概要」(大阪府教育委員会)、『長野郷土史研究会機関誌 長野』、定勝寺、土屋富孝「伊奈の石臼」、三鷹市教育委員会『水車屋ぐらし』、井伏鱒二「石臼の話」(『文人の流儀』角川春樹事務所)、『日本書紀』、東福寺、『慕婦絵詞』、『四條流庖丁書』

《完》